

トヨタ財団
広報誌[ジョイント]
January 2019

No.29 **【特集】**
活躍する「若い力」

「最近の若者は……」という決まりきった批判があります。しかし、混迷を深める現代こそ若者の柔軟な発想や行動が求められているとあってよいでしょう。本号ではそんなステレオタイプの批判を払拭する、世界で活躍する若者たちの将来にける意欲と今の姿を特集します。





公益財団法人トヨタ財団会長
小平信因（こだけいら・のぶより）

2019年新年のご挨拶を申し上げます。
今年、天皇陛下が退位され皇太子殿下が新天皇に即位される大きな節目の年となります。天皇陛下が即位されたのは1989年。日本はバブル景気の真っ只中にあり、ベルリンの壁崩壊に象徴されるように、東西冷戦が終結した年でした。

それから30年余り。日本も世界も大きく変貌しました。世界をみると、冷戦の終結を機にフランシス・フクヤマが「歴史の終わり」で述べたような、「民主主義と自由経済が勝利することによって、民主主義が社会制度の最終形態として社会の平和と自由と安定を維持する」との仮説はこれまでのところ実現されず、米国やヨーロッパ諸国等では社会の分断やポピュリズムの盛り上がりなどある意味での民主主義の弱点が表面化しています。日本をみると、バブル崩壊以降さまざまな取り組みが行われてきているものの、課題は山積しています。少子高齢化は一段と深刻化し、人手不足が顕在化し、地方の経済社会の疲弊が進んでいます。こうした状況が続けば、長期的には、経済の衰退、さまざまな制度・仕組みの機能不全、災害対応力の低下など国の基盤が揺らぐ恐れすらあります。

このように世界・日本が大きく変貌する一方、デジタル革命等のイノベーションの飛躍的進展が今や「第四次産業革命」と総称される新たな時代を生み出しつつあります。既に「AI（人工知能）」、「IoT」（モノのインターネット）、「ビッグデータ」、「ロボット」といった先端技術が経済、社会、人々の日常生活に深く浸透し始めています。第四次産業革命は、世界が抱えるさまざまな社会的・構造的課題を解決するにとどまらず、新たな価値を創造することにより人間中心のさらなる豊かな社会を実現することが期待される一方、これまでとは質の大きく異なる新たな技術が、人類が経験したことのない速さで進展していることに、社会の仕組みを始めとして人類がどう的確に対応していくのかという課題に直面しています。こうした課題に知恵を結集して前向きに対応していく一助とすべく、トヨタ財団では「先

端技術と共創する人間社会」という特定課題を立ち上げました。春には、助成採択に至ったプロジェクトを皆様にお知らせすることを予定しております。

先に述べたように、現在日本は多くの課題に直面しています。トヨタ財団は可能な限り課題を先取りし、「よりよい明日」につながる未来志向の志をもって活動を推進して参ります。限りあるリソースを有効に活用すべく、「真に社会的意義がある」という視点を常に念頭において重点化を進め、必要に応じて関係の皆様と連携しつつ、対象事業の実があがるよう努めていきたいと考えております。皆様の変わらぬご支援とアドバイスをお願い申し上げます。

それでは2019年の皆様のご多幸をお祈りしながら、筆をおかせていただきます。



冬の始まり、まち全体が凍り付いたように霜に覆われる朝があります。そんな日に見つけた山茶花と霜の美の競演。収穫期を終え、色を失った畑で、そこだけが鮮やかに輝き、命のエネルギーを放っていました。あまりの美しさに、寒さを忘れるほど見とれてしまった朝のひとつでした。（本誌P.26参照）

Photo by Michi Kaga

CONTENTS

FIRST WORD ● 小平信因

新年のご挨拶 2

特集：活躍する「若い力」

国内助成プログラムインタビュー ● 田中惇敏

課題解決の方法は大事、
おもしろいことをやっていく 5

国際助成プログラムインタビュー ● 海老原周子

見過ごされがちな価値や可能性と
世の中をつなぐ存在でありたい 8

研究助成プログラムインタビュー ● 新保奈穂美

都市内農園を多様な人々が
気楽に付き合える空間にしたい 11

イニシアティブプログラムインタビュー ● 高城芳之

NPOも学生もみな成長し
層の厚みを増やしていく 14

国際助成プログラム 寄稿 ● チューブ・サラーン

移民ユースのエンパワーメント 17

活動地へおじゃまします！〈竹原集落を訪ねて〉 ● 比田井純也

人口8名4世帯の限界集落、竹原集落の持続のために 19

山岡義典さんと語る ● 佐藤綾乃

未来のストーリーを描き共有する人を増やす 22

「私」のまなざし ● 高村加珠恵

入管収容の現場から真の「共生」の可能性を探る 24

お茶っこ通信 第十回 ● 加賀 道

昔も今も人は自然と共に生きている 26

トヨタ財団ジャーナル 27

● OPINION

● 2018年度国際助成プログラム助成金贈呈式を開催 他

日本最古の歌集「万葉集」に編纂される
「田子の浦ゆ うち出れば ま白にぞ 富士の高嶺に 雪は降りける」と
山部赤人が詠んだ田子の浦越しの富士山（薩埵峠から撮影）

撮影：遠山敦子（トヨタ財団理事長）

PROFILE

特定非営利活動法人Cloud JAPAN
代表理事。特定非営利活動法人
HOME-FOR-ALL 事務局長。株式
会社おかえり代表取締役社長。東
日本大震災を目の当たりにし、ボ
ランティアを九州から東北に派遣
する団体「Q.E.D.Project 架け橋」
を九州の大学の学生とともに設
立、その後、宮城県気仙沼市に移
住し、気仙沼を中心にさまざまな
活動を行う。



国内助成プログラム助成対象者

田中 惇敏

Tanaka Atsutoshi

課題解決の方法は大事、
おもしろいことをやってみよう

——田中さんは今は九州大学の学生ですが、
どのような勉強をしていて、なぜその勉強を
始めようと思ったのか教えてください。

九州大学工学部建築学科の4年生です。3
年間通って4年間休学して現在は8回生目
になります。建築学科を選んだのは、九州大学
のオープンキャンパスで建築模型が展示され
ていたのにビビッと来たからというのが表向
きの理由。説明していた大学生のお姉さんが
とてもきれいだっただけというのが裏の理由です
(笑)。一級建築士の資格があると古民家や空
き家の改修ができるので資格は取りたいと思
いますが、建物を作るというより、存在する
建物を運営したいです。研究室は建築計画学
というところで、新築を作るといってより存在
する建物をどう活かすか、地域と建物の関係
を良くしようということをやっています。
3年しか学ばず休学しましたが、自分が
やっている空き家活用の活動に少なからず役
立つ知識があったと思います。

——今気仙沼で事業をされていますが、なぜ
今の事業を始めたのか、なぜその事業内容に
しようと思ったのでしょうか。

今解決が必要な課題だと思うことに取り組

聞き手◎比田井純也(国内助成プログラムプロ
ラムオフィサー)



特集

活躍する「若い力」

◎大野満(トヨタ財団事務局長)

今号の特集テーマは「若い力」です。日ごろ私もは、助成先の方々とお付き合い
させていただく中で、多くの大変魅力的な若者たちと知り合うことができます。そこ
で、新年号に相応しく今号では、私どもが知り合ったピカピカと輝いている若者たち
の魅力をも、JOINT 読者の皆様にとっぴりとご紹介させていただくことにしました。

ご登場いただくのは、20代から30代までの若者5名(チーム)です。その属性は、
NPOを中心として、学生であったり、大学で教鞭をとっていらっしゃる方もいたり
とバラエティに富んでいます。助成プロジェクトについては勿論、どのようなきつ
けで今の活動をしているのか、活動を続けてきた中で苦労したこと、うれしかったこ
と、大切にしていること、将来の夢、などなどをお話しいただきました。皆さんに共
通しているのは「人が好き」ということでしょうか。その辺りを読み取っていただけ
ましたら幸いです。

紙幅の関係でお話しいただいた全てを掲載できないことはとても残念ですが、これ
につきましても、別途、私どものウェブサイトでご紹介させていただくことも考えて
いますので、ご期待ください。



みたいと思ってきました。絵本カフェもゲストハウスも、その瞬間必要なニーズだったのでやっているみたいなのところがありますね。一番最初は震災があって1年くらいたつたところでボランティアとして気仙沼に行きました。そこに特別な思いがあったわけではなく、ボランティアが終わって戻ってきたら普通に建築を勉強して、卒業したらどこかの設計事務所に入るとい流れの最初の一步として、被災地を見ておいたほうがいいだろうというくらいの気持ちで気仙沼に行ったのが2012年の3月です。自分と同じ福岡の学生にも同じ経験をしてもらいたいと思って、福岡から学生を派遣する団体を作ったのが同じ年の5月ころです。

ボランティアの数が増えてくると泊まる場所もなくなるので、地元で活動していたNPOの事務所まで寝かせてもらっていました。ホテルに宿泊すると1万円くらいはかかるので、これからもボランティアを続けるにあたって安価で泊まれる場所が必要と思ったのがゲストハウス事業のきっかけです。もつというところ、たまたま行っていたボランティア先にお寺があったのですが、そこの方がどこに泊まっているの？と聞いてくださって、NPOの事務所に泊まっている話をしたら、檀家さんが持っている空き家を貸していただけよう便宜を図ってくださいました。そうしたら東京の学生団体さんたちも使いたいと言いはじめたので、「ゲストハウス架け橋」という名前にしました。その時はゲストハウスに泊まったことがあったわけでもゲストハウス

れている子たちは正社員として雇っているの、健康保険とか全部含めて雇用しています。自分の給料ももちろん出していますし、別のゲストハウスやNPOからお給料をいただいていますので、同じ年の東京のサラリーマンよりずっと多い月収を得ています。そもそも企業って売上を上げるのが仕事ですが、自分たちは社会にいいことをしながら売り上げを上げないといけない事業型のNPOなので、たとえばゲストハウスでお金を稼いでいます。まわりに起業家が多いのでお金を稼ぐというのは僕にとっては当たり前の文化。お金を稼ぐことと社会にいいことをすることをどれだけ掛け算できるかだと思います。それが新しいわくわくするような課題解決の方法だと思ってるので、これからも給与形態は変えるつもりはないですし、日本のNPOの中でも高収入の水準を保てるようになっていきたいと思っています。

——そうしたほうが若い人たちの就職活動の中にNPOが入ってきますよね。一般的な学生はNPOに就職するという選択肢自体を持たない人が多いですが、田中さんみたいな新しいNPOの在り方は僕はとても望ましいと思います。そうしていかないとNPOの価値が上がらない。

相乗効果だと思います。賃金を上げれば優秀な人材が入ってきますよね。以前より能力の高い学生がインターンに来てくれてる感覚があります。これってほかのNPOの方々とも共有したい価値観なんですけどね。今認定NPOを取ろうとしているのですが、そう



をやったかったわけでもなかった。ゲストハウスという存在すら知りませんでした。

——事業のことをもう少し教えてください。特に気を付けたたり意識したりしていることってありますか。

持続可能性というところはとても意識していて、いただいた助成金は初期投資なので、それで持続可能なものをつくるというのが前提になっていて、それが地域の方のためになるようにというところは意識しています。寄付金がなくても回る仕組みにしないと、思っています。

社会に必要なからというだけではなくて、その活動でみんながわくわくするかということも意識しています。課題は見つめないといけません。——今後の事業の展望や目標を教えてください。活動を通じてどんな社会、未来を作っていきたいですか。田中さん個人として3年後のビジョンと10年後のビジョンを教えてください。

組織としては、NPO法人クラウドジャパンで地域や地方に限らず、全国どこでもいいと思うのですが、その地域のためにやりたいと思ってる活動する人たちがわくわく仕事ができる、それで食べていける社会を作りたいですし、みんなが主体的に社会課題に取り組める、たとえば5歳でも98歳でも地域のために何かできるということ、地域が応援できる社会を作っていきたいというのは組織としてずっと思っています。

個人的には3年後も大学にいたいんです。院生、博士、講師、どのような状況なのかはわかりませんが、まだ学び続けていたいと思います。現場だけでは見えないものがあるというのは、最近現場を半年くらい離れて感じました。片足は必ず学術、片足は必ず現場に置きたいです。

——田中さんは4年間休学されましたが、僕だったら怖さもあると思うんです。その時の心境はいかがでしたか？

最初から4年間休学しよう決めていたわけではなくて、最初は1年だけのつもりでしたし、2年目も2年でやめるつもりでした。自分が学生を預かる側になって感じたことで

ないので、それをどうやって面白く変えていくか。誰もやったことがないような課題解決の方法は大事にしているつもりです。こうすれば必ず成功するけど面白くないというようなことはやりません。

——活動における田中さんのモチベーションは何ですか？

気仙沼に第二の家族がいるんです。ボランティアの途中でたまたま休みに行ったお茶屋さんのことなのですが、これまであまり感じたことがなかった人の温かさを体感させてくれたおばあちゃんがいる、気仙沼に行くとき必ずお会いしていますし、お孫さんも含めて家族皆さんと親しくさせていただいています。

気仙沼とか復興支援とか起業とか関係なく、その人たちと生きていきたいというのがモチベーション。その人たちが石巻に行くというなら自分も石巻に行くと思います。自分の家族ももちろん好きですが、第二の家族も好きです。人と一緒に生き続けたいというのがモチベーションですね。他にはお金がNPOのモチベーションとしてあってもいいと思っています。

——NPOでも最低限のお金、もしくはそれ以上を得られないとモチベーションにつながらないですよね。日本におけるNPOの価値ってまだまだ低いと思っていて、民間と同じレベルまで賃金上がるべきだと思ってるのですが。

民間よりも稼げる組織にしたいと思っています。うちの組織ではスタッフにそれなりの時給を出していますし、1年休学してきてく

すが、預かる側の人間が変わらないといけないですね。今年も休学してくる子がいるのですが、ゲストハウス架け橋をその子に丸ごと任せて代表になってもらおうと思っっています。自分の側が学生をコマとしてではなくてプレーヤーとしていかに受け入れるか。その子の成長を一番に考えると自分たちが変わります。

なぜゲストハウス架け橋を全面的に任せるといって、感性はどんどん変わっていくかといかないんです。学生にプレーヤーとして預けたほうが面白くなると思っていて、人間の流動性みたいな意味合いで、休学期間の学生のように仕事を休んだ社会人たちが流動する中で、社会がもつとアップグレードしていけばと思います。学生にはそういう理解がある人たちを見つけてそういうところに行ってください。

学生と同じように社会人も人生の休学期間を作れるようなことを法律で決めてほしいですね。全日本人は1年間休学期間、ノーリスクで活動できる期間という意味ですが、それを取れる。そうすれば流動の中で面白いことが生まれっていくと思います。社会に出て数年働いて、他のところってどうなっているんだろう、自分って本当にこの企業にいいのかな、みたいなときに1年くらい休学できるイメージです。

——本日はありがとうございました。益々のご活躍を期待しています！

見過ごされがちな価値や可能性と

世の中をつなぐ存在でありたい



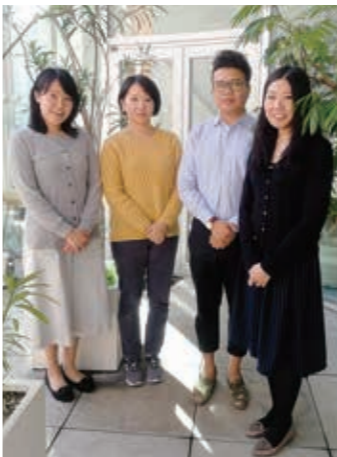
国際助成プログラム助成対象者

海老原周子

Ebihara Shuko

PROFILE

一般社団法人kuriya代表。(独)国際交流基金や国連機関で勤務後、移民の若者を対象としたアートプロジェクトを立ち上げ、多文化なコミュニティづくりや人材育成を行うなど、移民の若者に焦点をあてたアート活動を行う。2016年、一般社団法人kuriyaを立ち上げ、エンパワメントプロジェクト「Betweens Passport Initiative」を始動。



聞き手●前川智美(国際助成プログラムプログラムアシスタント)「左端」。その右がkuriya理事の桑原優希さんとアビナッシュ・ガレさん

——海老原さんたちは、東京、香港、ペナンの3都市間で、アートを通じた移民ユースのエンパワメントを目指すプロジェクトを実施されました。まずはkuriyaという団体を立ち上げた経緯を教えてください。海老原さんは国際交流基金で仕事をされていたときから今のようなことをしたいと考えていたのですか？

海老原 いえ、まさか自分が社団法人を立ち上げるとは思わなかったです。前職で立ち上げて3年ほど社内でも実施したプロジェクト「新宿アートプロジェクト」があり、それを抱えて独立しました。kuriyaという団体名は、^{みぐりや}御厨、いわゆるキッチンのこと。独立当時、一緒に試行錯誤してくださった中国ルートの方が提案してくれました。若者たちの多様性を引き出して社会に届ける、というビジョンにぴったりだということで団体名に揭げています。

——もう少し前、たとえば中学、高校生の時に自分の今の姿って計画あるいは想像していましたが？

海老原 14歳くらいから将来は何かアートに関わる仕事か、いわゆる『移民』というか外
——もう少し前、たとえば中学、高校生の時に自分の今の姿って計画あるいは想像していましたが？
桑原 一番大変だったのは4月に行った最後のワークショップでしょうか。ここにたどり着くまでに日本から香港、香港から日本、日本からペナンなど大移動を繰り返しています。移動はさほど大変ではなく楽しかったのですが、それで生まれてきた点をどのようにして線にするのかまとめるのが大変でした。

海老原 相互に交流しながら、刺激を受け合い作り上げていくものだったので、最終着地点が見えるまで模索しました。こっちでいいのか、こういう方向性、こういう形があるんじゃないかと相談しながら。形が出来上がるまでが難しかったです。

桑原 それでもプロセスは楽しいことばかりでしたし、どうにかなるのはわかっています。素晴らしいメンバーが揃っていたうえ、アーティストやファシリテーターが三か国にもまたがって移動する大きなプロジェクトというのはあまり聞いたことがなく、新しいことをやっているなという感覚はありました。

——プロジェクトをやっているのに嬉しかった思い出はありますか？

桑原 香港とマレーシアからアーティストをこちらに招いてワークショップを実施したというのは初めてでした。その試みがとてもチャレンジングで面白かったです。それまで培ってきたネットワークではありますが、実際に集まって、初めて会うユースたちと共にやり遂げることができた、というのがすごく

国人に関わる仕事に就きたいと思っていました。あと教育です。その3つを掛け合わせた活動というのは当時なかなか見つけることもできなかったのですが、どのように仕事とすればいいのかわからなかったのですが、今はあの時ぼんやり描いていたことの輪郭がハッキリしてきたのかなという感じがしています。

——14歳の時とこのことですが、どう違うことがきっかけで？

海老原 13歳の時にイギリスで現地校に通っていました。英語ができなくて1年間苦勞しました。でもアートや文化は好きだったので、そこを通じて友達ができたという経験があります。

——プロジェクトを続ける、あるいはそれ以外の活動を展開されるなかで、その原動力は、楽しさと、関わってくれる人の変わっていく姿を見ることでしょうか？

海老原 ユースたちの成長を見られるというのは醍醐味です。それ以上に社会の中でまず必要になっていくユースは大事な社会の担い手だと思っっているの、彼らの成長に関わることが出来るのは幸せなことだと思います。

——今から3年あるいはもう少し先の10年後には、社会はどうなっていると思いますか？そのなかで、次はkuriyaでこんなことをやりたい、という構想はありますか？

海老原 3年後だとちょうどオリンピックが終わっています。オリンピックを一つのキックオフのタイミングにしたいと思っています。いま移民や外国人の若者や子どもといっ

たときに、日本語ができない、文化になじめないなど、被支援者として見られがちです。ですが、活躍の場が与えられると参加ユースは自発的にリーダーシップを発揮します。そして多様な経験をしています。彼らだからこそ見える社会の課題というのが。それらに対してリーダーシップを発揮できるようにプログラムや、ワークショップを今後開発していきたいと思っています。オリンピックに向けて社会がますます多様化していくなかで、一人ひとりが社会を担う存在になっていけると信じています。そういう移民の若者を含め多様な若者たちのリーダーシップを育てる手助けをしていきたいと思っています。

また、身近に外国人がいるのが当たり前という状況になったとき、そういう子どもたちが彼らに適した教育を受けられること。さまざまな将来の選択肢や機会があること。日本に来てよかった、日本で育ってよかったと実感できる社会になってほしいです。そのためにもまずは、外国籍のユースに限らず多様な文化背景をもつ若者を育てることのできる担い手を育成することが重要だと思っています。日本人の若者育成を対象としている団体が国内にもたくさんあります。それらの団体に、私たちが外国人の若者と接した経験をもとにしたノウハウを紹介することで、外国人対応まで広がること。私たちのような小さな団体が協力し合うことで、大きな結果につながるようにしていきたいと思っています。

——トヨタ財団の助成を受けて実施したプロジェクトのことについて教えてください。

PROFILE

東京大学大学院新領域創成科学研究科自然環境学専攻博士課程修了後、筑波大学生命環境系助教。
2016年度研究助成プログラム助成対象「多文化共生型コミュニティガーデンの社会実装に向けた実証研究」



研究助成プログラム助成対象者

新保奈穂美
Shimpo Naomi

都市内農園を多様な人々が 気楽に付き合える空間にしたい

大きかったです。

海老原 私もその4月のワークショップが強く記憶に残っています。本当にできるのだろうか、中止にしたほうがいいんじゃないかって弱音を吐いたこともありましたが、それでも最後の団結力というかチーム力によって乗り越えられました。特にこういったアートワークショップというのはアーティストはゲストの先生という感じで上下関係性ができてしまうことが多いのですが、アーティストが自発的に動いてくれました。ビデオワークショップの参加者を集めるのはスタッフのアビナッシュがいなかったらできなかったですし、桑原さんにもフォローアップをしていただいています。その対応能力が本当に素晴らしかったです。

アビナッシュ 4月のワークショップでは、映像制作を行うチームに参加しました。このときの経験を振り返ると、短い時間のなかで作業しなくてはならなかったのが、アーティストからのアドバイスについて理解しようと必死に頑張りました。作成した映像を上映してみると、自分たちが想像していたイメージとはまた違って、映像を観た人たちはみな楽しんでくれて、笑ってくれました。その笑顔を見て、私たちはとても嬉しくなりました。大変な作業の後、みんなの笑顔を見ることができたことが、一番の思い出です。

——では最後に、Kuriyaとご団体は、みなさん各々の生活や人生にとってどんな存在でしょうか。

アビナッシュ 私にとってKuriyaは、単に



アートに関わる場ということだけではありません。Kuriyaは、私にアートの知識やスキルを与えてくれると同時に、私たち多文化のユースが日本の社会にもっと馴染めるように手助けしてくれるものです。日本人の若い人たちはオープンな方が多いですが、一般的に社会全体としてはそうとは言い切れません。物事の流れ方を知らない、その文化のなかで暮らすことはとても大変です。Kuriyaは、そういった初歩的なところから社会と接する機会が少なかった異文化の若い人たちをサポートしてくれました。Kuriyaのメンバーは、私をもっと社会に溶け込めるようにサポートしてくれています。アートを事業の一部として取り入れる団体ではありますが、実際はそれに限られていません。Kuriyaは私たちと社会をつなぐバッファゾーンのようなもの

なのです。

桑原 私にとっては不思議な友達のような、他にないものという感じです。特別なものはあるけれども影ながら見守っていたという存在。やっている内容は時々で変わりますが、ぶれない何かがあるところもある。ぶれないものを見ていると気持ちいいし、自分もそうありたいと思うし、目が離せない。私はKuriyaの理事ですけどそういうスタンスです。

海老原 これまで一人でやってきたプロジェクトから団体になった強みは、こうやってさまざまな人が一緒に組織として協働できることだと思えます。異なる個性や多様性やスキルを持った集合体チームですね。それを基盤に、社会の中で見過ごされがちな価値や可能性と世の中をつなぐ存在でありたいと思っています。同時に、私の中では変化し続ける組織でありたい。

社会の変化が激しいのでニーズも変わってきます。Kuriyaの前身の団体で映像ワークショップを立ち上げたのは10年前で、その間に変わっているところもあれば、当時課題だったことが今でもまだ解決されていないと感じる状況もあります。そういったところに対して私たちは先陣を切ってエッジを走り続けていけるチームで居続けられたらと思っています。アビナッシュは最初参加者の一人でしたが、事務局側に入ってきてくれました。今となってはなくてはならないメンバーです。次世代を担う若者のひとりとしてとても頼りにしています。

——幼少時代から研究者としての現在までの経緯を教えてください。

子どものころは何でも好きにやらせてもらいました。ゲームや漫画が好きでしたし、兄や近所の男の子たちとバスケットボールもよくしていました。あとは地元が浦和なのでサッカーを見に行ったり。兄がやっていた進研ゼミを私もやりたいと言ったりもして、勉強は楽しんでいたように思います。地元の公立中学に行き、県立高校に行くつもりだったのですが、学校紹介の本で見て憧れていた筑波大附属高校もいいなと思って受験したら合格してしまいました。

高校には頭のいい人が沢山いて挫折を味わいつつも、予備校でいけるのではといわれたこともあり東大を受験したところ理科二類に入ることができました。理科二類を選んだのは物理が苦手な生物が何となく好きだったの、それなら理科二類かな、と思ったという程度でした。三年生に上がるときに農学部かな、その中でもどの学科にしようかという時に、人数が少なくてレア感がある緑地生物学専修を見つけ、しかも緑のことをやるというのが楽しそうに思えて、進学先を選びました。



聞き手 ● 新出洋子(トヨタ財団広報)

とはいえ、あの時どうしてそれを選んだのか今となってはあいまいなのですが(笑)。

授業では横張真先生による緑地計画学の授業がとても面白く内容に惹かれて、ここが大きな転機となりました。ヨーロッパの緑地の歴史の紹介がされて、最終的に今日本でどうなっているかというような内容だったのですが、毎回先生に質問をしに行き、他のどの授業より真面目に受けていました。オーケストラをやっていることからヨーロッパに憧れがあったこともあり、半分興味本位・半分本気で先生にヨーロッパに行きたいと言いつつ、大学4年生の時にデンマークのコペンハーゲン大学で先生が講師として関わられるサマースクールがあるから来ないかと誘っていたら、世界中の大学から学生さんが集まるサマースクールに参加しました。そのついでにウィーンを見せていただきました。ウィーンにある都市内農園、クラインガルテンというのですが、その研究をしてはと先生に言っていたら、実際に現地を見て、そこからいろいろ始まった感じでした。上半身裸のおじさんが本を読んでいたりと、お花に水をあげていたりするのを見て、しかもそんな素敵なお庭が市中心部から地下鉄やトラムで10分くらいで行けるところがあるので、こんな生き方があるんだなとカルチャーショックを受けました。研究者になることを選んだのは、横張先生との出会いが大きかったと思います。もちろん研究室は先生のところを選びました。

ウィーンで受けたショック以降、「農」を通していきますからね。

はじめはこの多文化共生ガーデンはそのままに深刻に社会に必要とされるほどにはならなかったと正直思っていたのですが、現実が思いのほか早く近づいてきている感じがします。よくある、団地でのゴミ出し問題とか、パーティーの音がうるさいとか、スパイスの匂いがきついなみたいなことも、互いを知り合えればある程度解決できると思っていて、そのきつかけとしてガーデンはよいのではと思っています。大学の中にまず作ったのですが、大学は普段から留学生と日本の学生は近く接しているため、比較的日常生活にも抵抗がない特殊な場所です。今はさらにハードルの高いと思われる、外国人が多く住んでいる一般の団地でガーデンを作ろうという話が進行しているところです。

特に苦労したところなどは？

現在取り組んでいる多文化共生ガーデンの実験はアクションリサーチ的に取り組んでいるので、どういう風に進めるかをあらかじめ決めづらいたところがあります。どうしても多様な人が来るのか、というのがひとつ実験で解き明かすポイントなのですが、意外と人が集まらないというのが一番苦しかったです。コアのメンバーの学生さんは授業として取り組んでいるのでよく来てくれるのですが、それ以外の学内の方や地域の方を巻き込むのが難しいです。いま来ているヤギは沢山の人をガーデンに呼び寄せるための一つの策で、当初の予定にはありませんでしたが、ご縁あつて実現することになりました。

じて「よい生き方」を考えたいと思い、このクラインガルテンについて研究したいと強く思うようになりました。しかし修士になったときにウィーンで研究を続けるにしても、頻繁に行くことはできないですし、行ったとしても研究のイロハもわかっていなかったのでも、うまくいかなくなりました。その時に先生にまずは研究の基礎を学ぶために研究対象を日本の事例に変えることを提案されました。でも海外でやりたい気持ちが強くて最初は納得できず、悔しい思いをしながらも日本の事例を見て回っているときに日野市にある地域住民の方が運営しているコミュニティガーデンにたどり着きました。そのメンバーの方と一緒に雑草取りをしていたら、当時からかなり落ち込んでいた気分が明るくなりました。

研究者らしくない発言ですが、理屈ではない何か農作業にはあるかなと。誰でもできるけれどもやった後には効果が出る、植物は応えてくれる。今の世の中はすべてが高度化していて自分のやったことが何かになるという感触を得るのが難しいと思うのですが、植物は少し手をかければそれに応じて実らせたり枯れたりします。この、自分がしたことに対して素直に反応がみられることに勇気づけられました。さらに日野の皆さんは私の素性をご存じなくても全く分け隔てなく接してくださって、すぐに受け入れてもらえたということも印象的でした。この時から真剣にコミュニティガーデンのような空間が社会においてどのように役立つか調べようと思いました。

このようにやりながら状況に合わせて柔軟に研究計画を変えているので、きちんとしたデータのもとに研究論文としてまとめられるかという不安があります。出来上がっている事例を調べるのは調査や評価の方法を事前に十分検討できるのですが、今回は調査内容の設計が難しく、実験結果をどのようなデータで表すか、どのように評価するかというセオリーが定まっています。新たな人を巻き込んでいくうちに誰に対してどのような調査をするのか、その方法もどんどん変わってきてしまいます。ヤギ招聘などはまさにやりながら思いついたことで、確かに多くの人がきたのですが、さあそれをどういうデータで表しているのか、前の状況とどう比較すればよいかなど……とはいえ、楽しいです。

なお、一度あきらめたウィーン研究は、博士課程1年次にウィーン工科大学へ留学したときに実現しました。

プロジェクトの協力者は？

現場の方や大学の先生方、その他国内外問わず沢山の方にいつも支えられています。が、助成プロジェクトに関しては同じ大学の雨宮護先生がとても大きな役割を果たしてくださっています。約1500平米あるこの場所(ミューズガーデン)を前任の先生から借りて多文化共生ガーデンの実験をできるように調整もしていただきましたし、共同研究者にもなってくださいました。もちろん、実働部隊として学生さんにも大変助けられています。さらに最近ではヤギを貸してくださる近所の農家さんや茨城大学の安江健先生にもご協力いただいています。

都市の農のなかでも現在コミュニティガーデンに着目している理由としては、コミュニティガーデンが近年なぜ世界で同時多発的に増えてきているのかという疑問があります。社会的な流れであるんだらうと思いますが、それを解き明かしたいと思っています。資源循環や震災復興に対する役割などを調べていましたが、そうするうちにたまたまオーストリアのグラーツという街で見つけた多文化共生型のコミュニティガーデンに出会い、移民や難民の方と既存住民が理解しあえる場所になるんだなと可能性を感じたので、それを日本でもやってみようというプロポーザルに書き、トヨタ財団の助成をいただきました。日本も急速に外国人の方が増え

モチベーションになっていること、研究する上で心掛けていることは？

研究のおかげでいろいろな国に行っている人々の生き方を見ることができています。違う文化があっても最終的にはみんな同じようにガーデンングをしているのを見て、人間みんな一緒なのかもしれないな、とか。農的な活動と根本的な生き方のつながりを世界中で見えていくのが楽しいです。

心掛けているのは他の人があまりやらなようなことをやりたいということでしょうか。ドイツ語を習得してドイツ語圏を調査することにこだわっているのもその理由です。あとは素直に楽しいと思える生き方が提案できるような研究をしたいです。

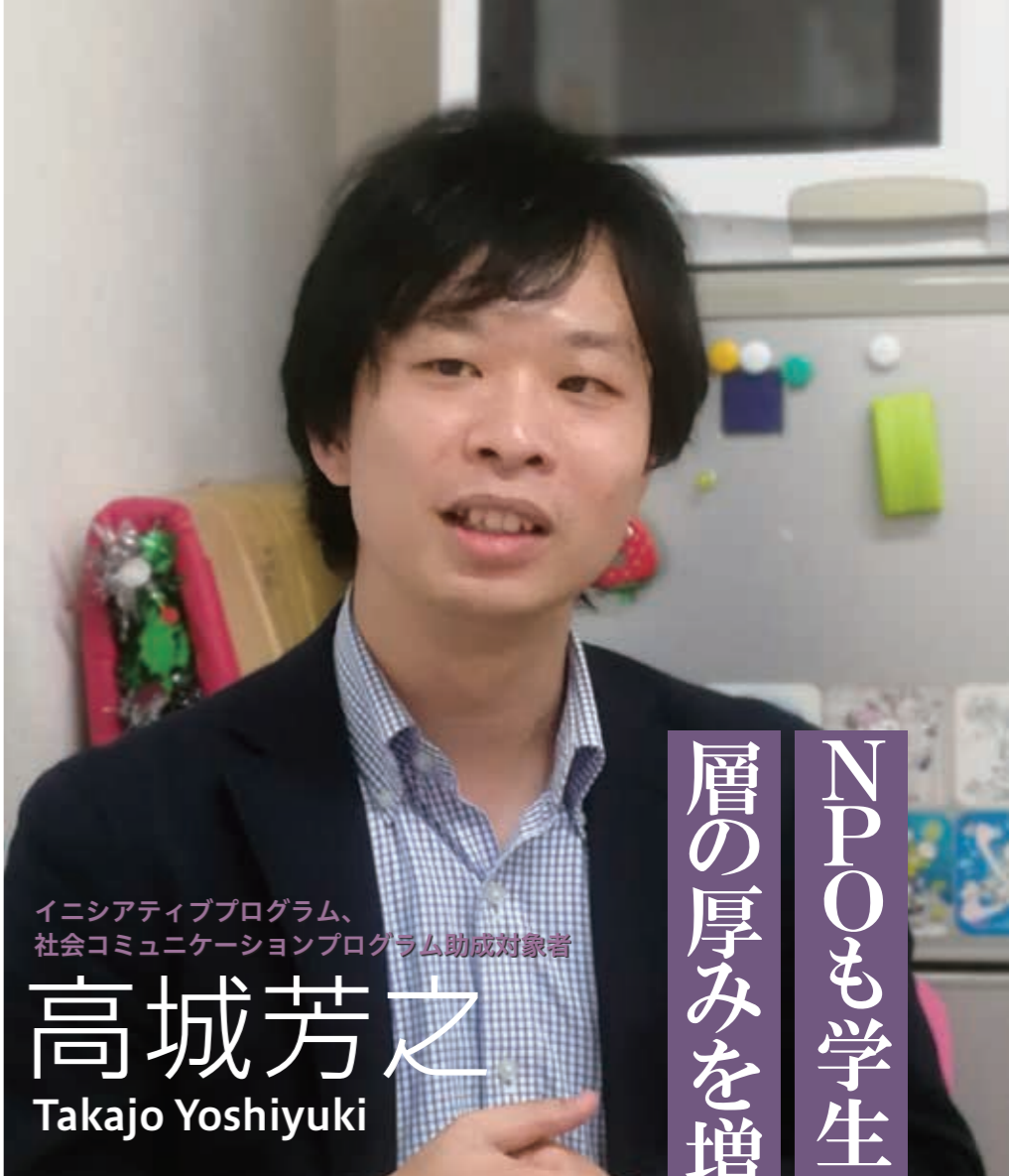
今後どのような社会になっていくことを期待していますか、そのなかで自身はどんな役割を果たしていきたいですか。

多様化している社会でいろんな人が共存共生していくことが大事という風潮になってきていますが、みんな同じ人間なんだという風に思えて、気楽に付き合っていけるような社会になっていけばいいなと考えています。日常のなかで知り合うきっかけがあれば多少の文化の違いは乗り越えられる気がします。これに向けて私ができることはコミュニティガーデンのような空間をつくることかな、と。ガーデンがすべてではないですが、きっかけになる場所をセッティングできる方法やノウハウを、研究を通じて提供できればいいなと思っています。



NPOも学生もみなが成長し

層の厚みを増やしていく



イニシアティブプログラム、
社会コミュニケーションプログラム助成対象者

高城芳之
Takajo Yoshiyuki

——高城さんは学生からNPOの世界に飛び込めたんですね。

大学は法学部に入ったのですが、1か月くらいで法学部は自分に合わないとかわかってどうしようかなと思っていて、たまたま大学祭の実行委員会に縁があつて入りました。ほとんどサークルというクラブ活動のような感じで、ずっと没頭してました。2年生の時は企画部について、3年生の時は部署のリーダーを担当しました。

企画部に入ったときに企画を作ることを経験して、それまで与えられた選択肢から選ぶことしかしてこなかったのが、作る体験がとても面白かったです。僕が作ったのは子ども向けの企画だったので、ゼロから自分で作ってこれをやりたいという思いを持って伝える経験がなかったので、それにハマってしまった。ですから大学祭が終わった後も続けたいと思って大学3年生の夏にボランティアサークルを作ったというのがきっかけですね。そのころはまだボランティアサークルがなかった時代で、僕たちは各大学で初めてサークルを作った、そんな世代でした。その後、地域で活動を進めていると、地域



聞き手 ● 大野満(トヨタ財団事務局長)

PROFILE

NPO法人アクションポート横浜
代表理事。認定NPO 法人CFF
ジャパン理事、NPO 法人くみん
ネットワークとつか理事、明治学
院大学社会学部 非常勤講師。大学
時代から「若者と地域をつなぐ場
づくり」をテーマに活動をはじめ、
新卒でNPOの世界に飛び込む。
2014年度・2015年度イニシアティ
ブプログラム、2018年度社会コ
ミュニケーションプログラム助成
対象

から学生ボランティアのニーズがあることに気づき、地域の交流会みたいなを作つて、募集しているNPOや団体と、僕が大学から連れてきた学生のマッチング会を企画しました。それでやっていたのですがうまくいかなかった。なんでうまくいかないかというのと、ボランティアを募集したいという団体と、ちょっと何かやりたいという学生、成長したいとか、将来福祉の仕事をしたからとかちよつとぼんやりした感じなので、お互いニーズが合わなくて行つても雑用だけさせられたとか、合わなかったみたいなきこになり、団体と学生双方からクレームが集まつてしまいました。人をコーディネートするというのは難しいんだなというのを知つて、コーディネートをしている人たちにいろいろ教えていただくようなことをしていました。みんなが就職活動をしているときに活動の方に夢中になつてしまつて。

——今は、ご出身の明治学院大学社会学部でも教えていらつしやるんですね。

社会福祉学科という明学が力を入れている学科の一つなのですが、フィールドワークという名前で、多様な福祉を学ぶ観点からNPOを見てみようという趣旨。簡単にいうとNPOインターンシップをやる授業で、今年は15人の学生がいます。

——10年間アクションポート横浜を引っ張つてこられたわけですが、その間に苦労したことが、嬉しかったことなどを教えてください。

資金繰りは大変でした。また、僕は前身の横浜市市民支援活動センター運営委員会の

時代から関わってきたので、アクションポートになったときの衝撃が大きくて。横浜市市民支援活動センターって「横浜市」がついているから企業に飛び込みで行つてもとりあえず話を聞いてくれるんですよ。でもアクションポートってなんだかわからないじゃないですか。認知度もないので営業しても何にもなりませんでしたが、話を聞いてもらえず営業すらできないことがありました。相談もこなかったです。サンプラザプロジェクトというのをもう10年くらいやっているのですが、これも最初は全く話を聞いてもらえなかったです。

今は100社近くの企業が関わつてくれて1000人以上集まるイベントになりましたが、当時は大変でした。今このプロジェクトは企業の皆さんで企画を立ててやっていただいています。私たちは事務局という立場でお手伝いはしていますけど、ほとんど一年がかりで企業の皆さんが実行委員長を決めたりしてやってくれています。

嬉しかったことは大学生が共感してくれるところでしょうか。あとは卒業生も参加しに戻つてきてくれることもすごく嬉しいです。

——学生スタッフというメンバーが伝統的にいますよね。

インターン生とは別に学生スタッフという学生を支えるサポートスタッフがいます。インターンシップで自分で企画をやってみるという成功体験や、やるたびに学生スタッフが支えてくれた、ケアされたという経験が大事です。自分が成功して楽しかったと思つたと

きに、支えてもらったからできたんだというのがちゃんとわかるので、そうすると自分も支えたいなと思うし、支えることに意味があるなというのがわかるので、なるべくインターン生からの学生スタッフというのを増やそうにしています。

——新しいキャッチコピーは「まちにたくさん
の主人公を！」ですね。

10年間やってよくわかつたのは、やはり人だな、と。人とのつながり、人との関係性というのがまちを作つていて、それが組織にながつていくと思つたので、人をどれだけ大事にできるかというところに軸を置こうと決め、このキャッチコピーにしました。今の高校や中学は特にそうですが、大学生を見ていても、正解探しばかりを学んできた感覚があります。インターン生を見てもちよつと前まではやりたいからという参加理由でした。しかし、最近の傾向は不安だから始めるという学生も多いです。正解探しの世の中で、自分がレールに乗っていないことへの不安とかなのかな。学校では輝けないけど、まちの中で輝けるというようなスポットライトの当て方ってたくさんあるなと思つていて、もっともっと活躍の場の種類が増えてもいいのではと感じています。その人なりの主人公のなり方がまちにはあると思うので、なるべくそういう舞台づくりをやつていきたいというのが目指すところです。

——トヨタ財団で支援しているインターンシッププログラムについて教えてください。
インターンシッププログラムは大学生がN

POでインターンをするというプログラムなのですが、大学と提携して授業の一環として行っています。横浜にあるNPO、法人格があるところもないところもありますが、地域に根差して地域の社会課題を解決しているような事業体に行つて企画活動をするということをやっています。派遣先のNPOは事業型でやっていることと、人を雇つて事務所があるという団体に限っていて、分野は子育て、まちづくり、環境、福祉……とさまざまです。10大学と提携していて、学生はそこから授業を経由して入つてきて、25くらいある団体から好きなところにマッチングをしていく。その前段階で研修会や面接をうちでサポートするというプログラムになっています。

比較的短期が多いのですが、60〜70人くらいが毎年参加して、10年で500人くらい卒業生が出ています。卒業生の中には社会人になつてからボランティアをしたいという人が増えていたりします。長期にわたるインターンシップは半年間ですが、毎年10人くらい、今年は7人います。

——団体側も単なる人手とは思っていないんですよね？

受人NPOと、なんで受け入れていいのかを共有する会を開催しました。共に生きる社会の実現が大事、学生も団体もNPOの価値を自覚するのが大事だという意見が出てきて共有しました。この会が感動的で、団体同士もやっぱりそれだよな！こういうことを目指してやっていきたいんだ、NPOや地域のコミュニティだからできる価値を気づいても



らいたいんだよね、みたいな。地域密着で次世代の人材育成も大切ですね。だから地元の大學生が参画してくれるのはいいことだと思いますし、社会人を数年やつて戻ってきたという人もいます。

——今年、NPOインターンシップラボもスタートさせましたが、そのあたりのことを教えてください。

トヨタ財団の助成金を受けて9月15日にキックオフシンポジウムを開催しました。人材育成は続けることが大事だというような基調講演があったりして非常に面白かったです。分科会はプログラムの作り方、お金について運営の部分の話、あとは学生とNPOの本音対談という3つがあつて、どれもすごくよかつたと思います。

寄稿

2016年度国際助成プログラム
「助成題目」日韓移民ユースエンパワメントのためのディーセントワーク
推進プロジェクト

移民ユースのエンパワメント グローバルでローカルな移民とホスト社会の課題に向 き合う次世代の人材育成

●チューブ・サラーン（NPO法人外国人支援ネットワーク
すたんどばいみー理事兼事務長）

私は、1989年カンボジアのインドシナ難民としてタイの難民キャンプから家族5人で来日しました。来日当時5歳だったので小学校1年生から入学することができたため、日本語を不自由に思うことはありませんでした。日本語を得意としない両親のためによく小さい頃から通訳をしていたことで、母語であるカンボジア語を忘れることなく、保持することができました。

私が暮らす神奈川県営いちよう団地の地域には11か国以上の多国籍の人々が生活しています。インドシナ難民の家族や中国残留孤児の子孫とその家族、日系人と呼ばれる人々、出稼ぎや国際結婚で呼び寄せられた人々です。学校、地域での生活の中には、私を含む「外国人」が共にいることが当たり前でした。

私の地域には外国人の適応支援として日本

語のボランティア教室があります。私も幼少の時からそうしたボランティア教室に通つて学校の勉強をしていました。当時は地域の外国人の高校進学率が半数も満たないような状況で、ただただ漠然と将来展望もないままに勉強をしていました。全日制の高校に受け入れらるラッキー。そうでなければ両親と同じような工場での労働が私たちに与えられた選択肢でした。戦争から逃れて難民として渡つてきて、「平和」な日本で暮らすことができたことが私たちに与つた「全て」でした。

しかし、子どもだった私たちは成長するにしがたい大人が提示する「全て」に疑問を持つようになりまし。 「全て」を疑い「可能性」を見出したいと思うようになり、2001年に数名の同じ境遇の仲間たちと一緒に当事者自助支援団体として「すたんどばいみー」を結成しました。

当時私は高校1年生で、初代代表を務めま

——どのように発展させたいですか？

いろいろなチャレンジをしてみたいですね。オーダーメイドで作っていく。地方は地方でまた違う課題があると思うので、そういう方々が普段思っているようなこととか、地方に若い人をどう増やすのかというのはぜひやってみたいです。

どうやって若者とNPOと地域のいい関係を作っていくかということ、彼らをその中で育てていきながら次の世代につなげていくかという話なんです。テーマを決めれば大学も巻き込めると思いますし、NPOも行政も企業も巻き込むことができますので、切り口を変えていくことでいろいろな人を巻き込むことができると思います。

10年後のアクションポイント横浜は？

10年後は今の学生スタッフ世代が活躍しているといいなと思います。次の10年では次世代コミュニティを育てていけないといけない。NPO職員だけ育ててもダメで、それを一緒に支えていく仲間を作ってみんなで育ちあつていかないとけないと思います。層の厚みを増やしていくというのかな。

カリスマが一人いるというよりは、今日同席している学生スタッフの長浜のような人が5人くらいいて、一つのものを作つていたりとか新しい何かをつくつていくというのが地域に増えていくのが理想。そうなればNPOインターンシップはコミュニティづくりはかなり貢献できるのではと。そういうふうになつていくと地域が面白くなるだろうなと思います。

私たちは高校進学のための学習支援補助や、学校相談・生活相談、イベント企画、母語教室などさまざまな活動を実施してきました。年間延べ500人以上の外国籍、あるいは外国につながる子どもたちが活動に参加します。現場スタッフは小さい頃からずっと「すたんどばいみー」で育つてきた若者です。自身の経験や苦悩を、次世代の子どもたちに地域のお兄さんお姉さんという立場で助言をします。

私たちには日本の社会システムを得意としない両親がいます。そのような両親のもとで与えられるサポートは限られるため、高校・大学進学を諦める傾向にあります。そうなる

と、親と同じような職業に就くしか道は開か



韓国でのシンポジウム



活動地へおじゃまします!

竹原集落を訪ねて

人口8名4世帯の限界集落、竹原集落の持続のために

◎比田井純也 (トヨタ財団プログラムオフィサー)

山頂からの眺め

こうした状況に対して、2015年、竹原集落における域学連携の成果としてロングトレイルの導入が提案され、洲本市役所、住民、学生との官民学連携の取り組みとして事業が進められてきました。具体的には、山林道の調査によるルートの選定や、試験的なイベントを実施しての意見収集やノウハウの蓄積、集落外の協力者の募集です。そ

限界集落となった竹原集落

プロジェクトの活動地である竹原集落は、かつて備長炭の名産地として名を馳せた集落で、炭職人がいなくなった現在も集落の四方を囲む山林には、林道や炭窯が形を保ったまま残っています。こうした産業遺構は地域資源としての存在価値を有していると考えられています。現在のこの地域は人口がわずか8名、4世帯となっており、今後の集落の持続に際しては予断を許さない状況になっています。この課題を乗り越えるためには、交流・関係人口を惹きつけ、また移住人口を受け入れるために新たな産業振興の構築が急務であると考えられています。

【訪問地】
兵庫県洲本市
竹原集落(淡路島)

【助成題目】
林道の観光ポテンシャル調査——再び山と共に生きる為の里山資産の読み換え



山間に位置する竹原集落

2018年11月2日、すっかり秋の気候になり過ごしやすくなってきた東京を離れ、兵庫県淡路島を訪問してきました。今回ご紹介するのは、2017年度国内助成プログラムの助成対象プロジェクト「林道の観光ポテンシャル調査——再び山と共に生きる為の里山資産の読み換え」(代表…太田明広氏)です。



①



②



③

すたんどばいみー活動の様子。①勉強合宿風景。②大人の日本語教室の様子。③お兄さん、お姉さんの職業紹介の様子

れていません。日本社会で日本人と同等の扱いを受ける、あるいは同等の選択肢が持てるようにたくさんの日本人や外国人の大人を動員しつつ自助に向けた支援をします。当法人の団体名「すたんどばいみー」とあるように、私たちは日本で暮らす外国籍の子どもたちや大人の方々のそばに寄り添い続けます。

国を超えて連携し学び合う

私たちがトヨタ財団から助成を受けたのは、2016年から2018年の2年間でした。特定非営利活動法人神戸定住外国人支援センター (KEC) を筆頭に、日本の移民関係

の研究者や共同研究先として、韓国の研究者及びNGO団体と連携して活動しました。本プロジェクトで韓国が対象となったのは、東アジアにおいて日本に次ぐOECD加盟国を果たした先進国であること、国民の単一民族意識が強く、経済発展に伴い都市に人々が集約されていく状況が日本と似ていること、急速に進む社会状況の変化(地域コミュニティや伝統的価値観の変化、核家族化、未婚化・晩婚化、少子高齢化など)や「移民」の受け入れが日本と同時期に進んできた背景があるからです。

そして両国は、グローバル化に伴い国際的

な競争が激しくなる中で、実質的に3K労働の担い手としての外国人の受け入れを加速させました。このような受け入れはホスト国における移民への偏見を生み出します。これらのことから、本プロジェクトは移民の人権とホスト国の在り方を考える機会として企画され、私たち「すたんどばいみー」からはインターン3名とジュニアコーディネーター1名及びメンター1名が参加しました。エスニシティ構成としては、カンボジアルーッ1名とベトナムルーッ3名、日本人1名です。韓国と日本における他団体の活動見学や、地域フィールドワーク、専門家による研修会を実施するうちに、お互いのインターンメンパーの交流が密になりました。また、活動現場の課題や解決方法を共有することで、現状課題の理解を深めていくことができました。一団体では限界がありますが、他地域の子どもたちの様子報告や解決方法を共有することで、それぞれの現場に活かすことができました。

加えて、特に今回は、さまざまな立場の人たちが「移民ユースのエンパワーメント」という課題に関わられた事によって、今後のホスト国の在り方を構築する際の新たな課題を発見できたのではないかと感じています。日本という国を超えて、他国の団体の取り組みについて学ぶ機会と体験する機会を持つことは、今後も社会的活動を展開する私たち移民ユースである「すたんどばいみー」にとっても大きな財産となりました。

して、同年11月には竹原町内会を母体とし、集落外の人もメンバーになって組織された「淡路島ロングトレイル協会設立推進委員会」(以下、CPAA)が発足しました。以降、竹原集落の交流人口拡大に向け、山林道の再価値化に着目し、暫定のトレイルルートの選定やイベントを実施してきました。

本プロジェクトはこの域学連携に端を発したもので、ロングトレイルを集落の新たな産業として展開していく上での観光資源の抽出と、それに関連した調査を目的としています。そうした中で考えられたプロジェクトイベントの一つが、今回参加させていただいた「歩く！直す！竹原D-I-Yトレイル」です。

竹原集落の孤立問題

前泊していた洲本市街から竹原集落までは車で約15〜20分程度。当日の朝、CPAAメンバーであり、竹原集落を管轄している洲本市役所産業振興部農政課の職員の高橋吉さんが車で迎えに来てくれました。高橋さんはとても明るいお人柄で、行政職員としていられると竹原集



①DIY作業に必要な木を切る岡田清隆さん(右)。②参加メンバーがDIY作業で設置したルート看板。③トレイルコースの足場整備の様子。④トレイルコースの目印。テープは自然に還る素材を使用している。⑤山中にある「炭窯跡」。⑥トレイルの見どころ「山の神様」

板の作り方などを知ることが参加者の良い経験になるので、DIYスキルを学ぶ場にもなっていたように思います。

冒頭でもご紹介した通り、竹原集落は備長炭の名産地として名を馳せた集落であったため、頂上へ向かう山中には炭窯が残っており、「炭窯跡」として見どころの一つになっています。まだ炭窯が現役で使用されていた頃、どのように活用されていたか現場で詳細に説明をしていただきました。炭窯周辺の地面の土を掘ってみると、真っ黒な炭が出てきます。昔は炭窯で作られた備長炭を運ぶために馬も山中を歩いていたと聞き、今でさえしっかりと舗装されていない山道を、馬と一緒に人間が歩いて運んでいたと思うと、相当な苦勞をされていたであろうとのべられます。また、もう一つの見どころとなっている「山の神様」は、枝分かれした大木が立っている真ん中に神様が祀られており、とても神聖な場所になっていて、同時に歴史を感じることもできました。当日は非常に恵まれた天気だったため、最終地点である頂上

落の問題について教えていただきました。高橋さん曰く「市街から車一台しか通れない細道で、いわゆる山道といわれる道が竹原集落まで続いているけれども、台風や豪雨が来ると道が通れなくなって竹原集落の住民が取り残されてしまうことがある。竹原集落だけの為に道を補装する予算をつけることは行政として難しい。このプロジェクトを通して竹原集落への注目が今後もっと集まれば、この道も整った道にすることができると行政側からの意見と共に、竹原集落へ関わるメンバーとしての思いもすがええた気がしました。

竹原D-I-Yトレイル

洲本市街からさほど遠くもなく、標高もそれほど高くないのですが、山間部という事もあり竹原集落の朝は11月とは思えないほどの冷え込みでした。今回のイベントには、登山やトレイルに興味がある方をはじめ、地元テレビ局の方、そして新聞社の記者の方が取材に来られるなど、幅広い参加者がいました。また、地元淡路島の方以外に四国や外国からの参加者もあり、総勢約20名が早朝に集まって、D-I-Yトレイルが始まりました。

「竹原D-I-Yトレイル」の先頭をきっていたCPAAメンバーの岡田清隆さん(環境省環境カウンセラー)は、70代とは思えない身のこなしで、トレイルコースの整備のために木を切り、D-I-Yの際の道具の使い方などを参加者に教えていただきました。農業研究者でもある岡田さんは知見、経験がものすごく豊かで、道中にある植物の特徴や、動物の習性などあらゆることを丁寧に教えてくださいました。笑顔が素敵で豊富な経験を持つ岡田さんに、参加者の多くの方が魅了され、私も岡田さんに魅了された一人となりました。

今回の主なD-I-Y作業は、トレイルコースの足場の整備でした。参加者全員でまだ足場がない傾斜をならし、鉄杭を打って、登山者が分かりやすいように木でコースの整備を行いました。ルートを間違えないためのルート看板を設置するなど、参加者が一緒にD-I-Y作業をすることによって自然とコミュニケーションが発生し、一体感が生まれていました。D-I-Yトレイルの魅力はこういったところにもあるのかもしれない。D-I-Yに必要な道具の使用法や、看

から淡路島の山々と海、明石海峡大橋や関西国際空港などを見ることができ、最高の達成感を得ることができました。

竹原集落の持続のために

印象に残っているのは、CPAAのメンバーとなっている限界集落の竹原集落住民の方々がトレイルイベントの実施に非常に積極的であり、行政、そして大学関係者の方々と非常に良好な関係を築き、密なコミュニケーションを取っていたことです。また、プロジェクトに関わる一人ひとりが専門的な知識を持っており、今後のイベントや竹原集落をどのように活性化していくかについて議論が活発に行われていました。

首都大学東京、龍谷大学の学生が積極的に事業に参加し、在学中はもとより、卒業後にも竹原集落に深く関わって定期的に活動を行っているとの話をうかがい、竹原集落と、そこに関わる人たちが両方の魅力が新たな人を惹きつけているのだと思いました。そしてプロジェクトの主体メンバーは年配者が多い中、洲本市地域おこし協力隊や、学生などの若い世代の人々がうまく巻き込まれており、次代の担い手となる方々の力強さを感じることが出来ました。CPAAのメンバーである野田満さん(首都大学東京助教)が、「この地域の方から教わる事が多くあり、少しでもみなさんに貢献したいと思う」と力強く語っていたのが印象的でした。プロジェクトのイベントである今回の「歩く！直す！竹原D-I-Yトレイル」は参加者の方々から好評であり、プロジェクトメンバーの皆さんも確かな手ごたえを感じているようでした。当事者である地域住民、行政、そしてプロジェクトに関わるメンバーの協働が不可欠ですが、今回の訪問で非常に活発な協働事業を垣間見ることができました。

今回、淡路島、竹原集落を初めて訪問させていただき、淡路島の魅力、みなさんのあたたかなお人柄に触れ、私もこの期間ですっかり淡路島ファンになりました。淡路島のいちファンとして「淡路島ロングトレイル協会設立推進委員会」を応援するとともに、プログラムオフィサーとして微力ですが、プロジェクトに一生懸命奔走させていただきたいと思います。



山岡義典さんと語る・佐藤綾乃

未来のストーリーを描き 共有する人を増やす

今回はNPO法の生みの親の一人である山岡さんに、北海道旭川市を拠点にNPO運営サポート活動を行う佐藤綾乃さんをインタビューしていただきました。これからの時代を担う「若い力」の可能性とその活躍の様子を探ります。

◎ 山岡義典（やまおか・よしのり）特定非営利活動法人市民社会創造ファンド運営委員長、助成財団センター理事長、日本NPOセンター顧問などを務める

北海道内では、中間支援組織だけでなく、独自の活動から派生したリーダーたちが集まって一緒にやるという動きはすごくたくさんあって、分野ごとであったり、親しい仲間が集まったりというネットワークはたくさんあります。ただ、どうしても札幌に集中してしまうのもどかしいところですね。私はやはり旭川を拠点にしたいのです。

山岡 地域のいろいろな団体と一緒にネットワークができればいいですね。行政の人たちとも一緒にできる感じですか？

佐藤 今年になってから市のNPO担当課の方とごつくばらんに意見交換ができるようになりまして。行政の方々とはいろんな場面で会うことがあるのですが、本職は行政だったんです。後から知ることが多いくらいです。何か新しいことや、今やっていることの促進につながるアイデアをお互いに出したりという関係はまだまだこれからですが、いろいろチャレンジできる場だとすごく感じています。

山岡 さらに、今後はどういう活動に挑戦されるのでしょうか。

佐藤 市民活動にとつてのお金ってどういう存在かとか、お金を集める、寄付をいただく、会計の管理をどういうふうと考えていますかというように、いろいろな人と話しながら活動したいです。活動にお金が必要というのとは絶対ではないとしても、地域の中での資金循環の仕組みを作るといえるのは一つ大きなテーマ。お金を地産地消するという考えもありだとは思いますが、旭川みたいなところ

”市民活動にとつてのお金ってどういう存在か“

山岡 簡単に自己紹介をお願いします。

佐藤 今は北海道旭川市を拠点にNPO運営サポート「あの屋」という名前で個人事務所を構えて、お声がけいただいたことにいろいろ

ろだと外からお金をどう持つてくるかということも重要です。一人ひとりのやりたいという思いを実現させるためには何が必要かという組織づくりの面と、それをやるにあたってお金が必要となったときにどうやって循環できるかというお手伝いをしたいので、いろんな形で挑戦していきたいと思っています。

それから今は旭川の街中を歩くと外国人をはじめとする観光客ばかりが目立って、市民が少ないのが残念なんです。市民が街に戻ってくるにはどうしたらいいかというのも課題です。

まちづくりの活動としては、商店会のある七条緑道という場所をエコミュージアムにしようという企画を、今年は旭川市と一緒にしています。近隣のホテルに協力してもらい、お客さんをおもてなしする作法を、高校生や大学生と一緒に学んだり、この場所の環境や歴史、人々の生活などを語るガイド養成講座やトークショーを行いました。

山岡 まちづくりが楽しくなって、そういうNPOができてくるかもしれませんね。



◎ 佐藤綾乃（さとう・あやの）「NPO運営サポート・あの屋」代表、旭川NPOサポートセンタースタッフ。2005年に認定NPO法人DPI（障害者インターナショナル）日本会議に入職。2014年に出身地の旭川市にUターンし、2015年「NPO運営サポート・あの屋」を開設

顔を出してお手伝いをするということをしていきます。あとは旭川NPOサポートセンターが指定管理として運営している旭川市市民活動交流センターでも仕事をしているという二本立てで動いています。

また、現在の事務所は商店街の中にあつて、商店会の理事もやっています。

佐藤 まちづくりが専門じゃない人が集まってまちのことを考えられるのがすごく楽しくて、東京に比べると、組織の人たちとかその分野で活動している仲間内からなかなか外に出ない、話も生活スタイルも考え方も。それで広がらない感じがしていて、まちは仮住まいみたいな感覚で帰って寝るだけになって、なかなかまちづくりに参加できないということがあります。本業は別にあつてやりたいことはまた別にある人のなかで、一つのテーマをいろんな視点で考えられるという環境が面白いし、東京にはなかなかなかったなと感じています。

”性急な課題解決より、あるべき社会の姿をイメージする“

山岡 同じ年代の市民活動をしている仲間たちに何かメッセージはありますか。

佐藤 まだ何かを伝えられるほど成し遂げてはいないのですが、ぜひ多様な人たちと一緒に何かやりたいというのはありますね。今の30〜40代って上下の世代をつなぐ役割というものもあると思うのですが、どうやってそれぞれに伝わるかというのを一緒に考えたい。

ファンドレイジングであつたりNPOの組織基盤強化とかいろいろなところで語られますが、割と一方通行なものが多くて対話にならず楽しめないような気がしていて、見栄えがいいものをどうやって作るかというのがあるんですけど、本当に大切なことを伝える方法って何かなというのを考える機会が少なくなっている気がします。新しい価値観を

知るってすごくわくわくするじゃないですか。それって一方通行では伝わらなくて、それはどうやって伝わるのかというのを一緒に考える機会をたくさんの人と作りたいなと思っています。

大学でも少し授業をしているのですが、たとえば、障がい者が地域の中に出て街で生活をするということを考えるときに、家や施設にとどまってしまうって、外はバリアフリーじゃないとか障がいがあつて外に出られないとかそういう問題意識で語られることって多いんですよ。そうではなくて、たとえば街の中に障がいを持った人が歩いている社会ってどうですかっていう問いかけをしたほうが、学生たちはどうやって障がいのある人も一緒に生活ができるかって考えてくれるようになる。社会の姿とかイメージを一緒に考えてみようという問いかけるほうが、すんなりみんなと一緒に考えてくれるというのを感じます。そのほうが学生たちも人として豊かになるかなと思つて。課題解決というのは目の前のこととしてすごく性急に深刻に語られることが多いけれど、その先の未来を一緒に考えるというのを大切にしたいです。

まちづくりにしてもNPOの活動一つひとつをとつても、関わる人がどういうストーリーを描き、それを誰が共感し共有していくかというように、未来を描く人をどんどん増やすことが活動の基本だと思つています。

山岡 そうですね。今日は遠いところどうもありがとうございました。

私

はカナダ東部モントリオールにあるマギル大学の国際開発学研究所に籍を置き、人の国際移動及び外国人労働者や難民など不安定な法的地位に置かれた移動者の人権問題に関心をもち研究活動を行っている。とりわけ私が研究のアプローチとして着目しているのは、入管収容という視角である。

「入管収容」という言葉はおそらく一般的な日本のメディアではあまり耳慣れない用語であるが、その定義としては「出入国管理法に基づき収容令書、あるいは退去強制令書の発行を受けた外国人の身柄を一時的に収容施設に拘束する」行為である。入管収容は、従来の移民研究ではあまり十分に議論されてこなかった視角であり、また入管収容施設が存在する施設内部での被収容者の取り扱いについては国家がほとんど公にはしてこなかった。

入管収容を考える上で一つの重要な法的前提として挙げられるのは、出入国管理法に基づく個人の収容はあくまでも「行政手続上のやむをえない場合の行為」であり、「刑事法に基づき受刑者の身柄の拘束行為」とは原則的に異なるという点である。

し かしながら、実際の入管収容施設内部における被収容者の取り扱い、特に個人の身体の自由を奪うという行為は、刑事法に基づく収容行為と非常に似通っていることがしばしば指摘されている。入管収容、特に収容の対象となる移動者の処遇をめぐっては、国際人権法とりわけ日本も加入している国際人権規約や拷問等禁止条約の規定に違反する人権侵害行為であるとして、近年では国

ように、戦後の国民国家制度の枠組みは国家主権を前提とすることで国家領域概念から外される無国籍者、難民を生み出し、「不法」という行政上の分類ラベルを貼ることで、「人権の普遍性・平等性」の原則を否定してきた。「入管収容施設」という人権概念から最も隔絶された特殊な空間を研究の対象とすることは、入管法に付随する根本的な暴力性を考えることだけでなく、身体的自由、権利を奪われた人々を目の前に「人間の尊厳」とは何か、我々が普遍的に認識する「権利」とは何かという問題と向き合うことでもあると考えている。

ま た入管収容という視角を通して見えてくることは、基本的な自由・権利を奪われた個人が人としての「尊厳」をあくまで取り戻そうとする抵抗の社会空間であり、真の「共生」の姿である。空港からそのまま収容施設に送られ、いつ出られるからもわからず途方に暮れている難民申請者、日本の小学校に通う娘の写真を誇らしげに見せる移民男性、日本で育ち日本語を流暢に話す日系人男性。彼らは、さまざまな形で収容という厳しい現実に向き合いながらも、人である証としての「尊厳」を必死に取り戻そうとする。また抵抗の社会空間は、収容されている個人だけではなく、被収容者の人権保護を訴える支援団体との連携によって初めてそれが実現される。

とりわけ、東日本入国管理センターに収容されている外国人を支援する市民団体の訪問活動に参加することを通して痛感することは、被収容者だけでなく、こうした人々を訪問する支援者側もまた入管法が構築する法の

「私」のまなざし 23

入管収容の現場から 真の「共生」の可能性を探る

文・写真 ● 高村加珠恵
マギル大学 国際開発学研究所



20年間以上入管収容の問題に取り組み、収容されている外国人支援を行っている、茨城県の取手市にあるカソリック取手教会のマイケル・コールマン神父



2018年7月5日に筑波大学にて開催した特別企画セミナー「国際的視座から問い直す入管収容と外国人の人権保護」



同セミナー参加者による記念撮影

連の場でも取り上げられるようになった。入管収容行為は日本だけではなく、移民・難民を多く受け入れてきた欧米諸国にも同様に見られ、特にアメリカでは中米から庇護を求め難民の収容、とりわけ難民の子どもを親から強制的に引き離すという非人道的行為をも正当化してしまう移民政策をめぐって、「国境管理・監視強化」に賛同する側と「人権保護」を訴える側との間で世論が分断している。入管収容という研究の眼差しは、国籍を問わず多様な人種・文化を平等に受け入れるという「共生」を一つの共有価値として掲げる民主主義社会が、根本的に抱える大きなジレンマを浮き彫りにする。

入 管法に基づき「不法滞在者」として行政的に分類された個人は、常に法の「壁」に囲まれ、我々がごく当たり前に考える「権利」概念が成立しない。たとえば、国内を自由に移動する権利、家族を養うため収入を得る権利、病院で治療を受ける権利など、人が人としてごく当たり前に生きるための権利は「不法滞在者」としてのラベルを貼られた個人には与えられていない。彼らは法的に国家領土内部から直ちに排除すべき対象とされ、国際規約では普遍的に保障されるはずの「人権」は抹消されてしまう。

政治思想学者のハンナ・アーレントの言う

「壁」を日常的に経験しているということであり、抵抗の社会空間は、ごくあたり前の我々の日常からは見えてこない法の「壁」の経験、人としての「痛み」を共有することで実現する。こうした点から鑑みれば、入管収容を研究テーマとすることは「管理・監視」の暴力が正当化されるメカニズムの考察であるだけでなく、真の「共生」つまり共に壁や痛みを分かち合うという、本来あるべき平等な社会の共有価値を実践する空間の記述であると考えている。

日 本国内では2020年の東京オリンピックを前に、移民労働者を受け入れる「共生」は、危険な対象として想像される「他者」を監視することを前提として初めて実現すると理解されている。それでは国家による「監視」を前提する「共生」ではなく、人間の尊厳を互いに認識・尊重することから生まれる真の「共生」の可能性をどのように我々は確保するのか。この答えの模索は、従来の「国際交流」という肩書きに目をやるよりも、むしろ入管収容という人権が最も拒絶された空間からこそ見えてくるのではないかと考えている。

● 高村加珠恵(マギル大学 国際開発学研究所)
2016年度研究助成プログラム助成対象「日本とカナダにおける外国人収容の実態とその人権擁護」 両国間の比較分析」

昔も今も人は自然と共に生きている

◎加賀道(トヨタ財団リサーチフェロー)



温泉石神社からの眺め

あけましておめでとうございませう！地元である宮城県鳴子温泉にUターンし、4度目の正月を迎えました。奥羽山脈に抱かれた我がまちは、雪の多い

地域です。食文化や暮らしのさまざまな場面でも冬を感じる事ができます。

たとえば、お正月。皆さんの自宅ではどんなお雑煮を食べますか。我が家のお雑煮は、焼きハゼと鮭から出汁を取った醤油ベースの澄まし汁に、引き菜大根と呼ばれる、大根を細く千切りにしたもの、芋茎と呼ばれる里芋の茎を干したものを、ニンジン、ゴボウなどが入り、セリ、かまぼこ、いくらがその上に彩を添えます。大根は、年末の内に大量に千切りし、さつとゆでて、ボール状にして冷凍しておきます。亡くなった祖母から聞いた話ですが、昔は、ボール状にした大根を屋外で凍らせて保存していたそうです。お雑煮を作る



我が家のお雑煮

の方が使われるようです。お雑煮ひとつをとっても、風土とうまく付き合ってきた人々の知恵が垣間見えてきます。

が、寒さや雪を受け容れることで、毎日の暮らしが楽しくなることもたくさんあります。たとえば早朝の雪かき。始めるまでは億劫なのですが、次第に体がぼかばかになり、エネルギーを使い果たした後にいただく朝ごはんの美味さは格別です。子どもたちも小さなスコップや雪かきダンブで張り切ってお手伝いしてくれませう。雪の結晶を観察したり、ソリやミニスキーを履いて登校・登園したり、2メートル近くあるような巨大なつららを発見したりできる冬は、子どもにとっても特別な季節です。しもやけと付き合わなければならぬ訓練はありますが、息をのむような白銀の世界や、透き通った空気、星空の美しさ等々は、味わった者にしかわからない自然からの贅沢な贈物です。

便利な世の中になり、何でも自分の思うままになりそうな錯覚に陥りがちですが、冬になると改めて、私たちは、自然という思い通りにならないものの中で暮らしているのだと気づかされます。その中で工夫を凝らし、楽しみや喜びを見つける。今年も、子どもたちとそんな経験をたくさんできればと思います。



雪掻きのお手伝い

トヨタ財団 ジャーナル

January 2019



OPINION

ちよっと前から トヨタ財団で働き始めた ある総務職員の雑感



稲見貴子
トヨタ財団総務部

JOINT読者の皆様、はじめまして。新入総務スタッフの稲見です。

今回はトヨタ財団で働き始めて約半年でまだまだフレッシュ(?)な私が、当財団の横顔を紹介するとともに、新入職員として日々感じたことを綴っていきます。

まずオフィス環境について。当財団は新宿副都心エリアでも歴史のある、新

宿三井ビルに入居しています。都庁に程近く、向かいには京王プラザホテル、横は住友ビルといった新宿副都心の真ん中に位置している、複数路線を利用可能という恵まれた土地です。また、今の時期(現在12月)では、各ビルが競って美しくイルミネーションを施して、通行人の目を楽しませています。アラ還の筆者の母が言うところ、昭和の時代にこの西新宿あたりは、はやりのデイトスポットだったそうです。

次に、財団の雰囲気や人間関係です。読者の皆様もお感じかもしれませんが、職員は自由でのびのびとしていて、人間関係もとてもフラットな組織だと感じています。前職で私はお堅い銀行勤めをしておりまして、制度の違い、そして雰囲気の違いにただただびっくり仰天でした。例えば、服装は自由、フレックスタイム、在宅勤務の職員もいる、直行直帰OKなど、私にとって初めてのスタイルばかりです。

その中で特に、カジュアルな服装は、とても快適かつ効率的なものでした。特にスニーカーで働くことは一番のライフハックでした。かつて5cmヒールの黒パンプスでオフィス街を闊歩していたのですが、それでは歩く速度が遅くなるだけではなく、足の疲労も激しいものでした。当時は履きやすいお高めの靴をあえて買っていました。魚の目や靴ズレは日常茶飯事、足の裏は常にトラブルだらけでした。

当財団に来て、仕事場での履物をスニーカーに変えたところ、あら快適！一日1万

歩を歩いたって疲れないし、足の裏もつるつるピカピカ！とまではいきませんが、トラブルとは無縁で過ごせています。もちろん、一日中高いヒールで歩き回ってもへっちゃらという方もいるので、私個人の意見です。

話は変わりますが、会社紹介で「フラットでアットホームな職場」という謳い文句がありますが、当財団はまさにその言葉通りです。職員は総じて穏やかで、自身の評価に固執するところが比較的少ないように感じます。昔の上司に、「仕事は自分で取りに行け！」と指導されましたが、ここには違います。その仕事が必要か、何が最善かを考えたうえで、仕事をします。それを強く感じたのが、あるワークショップでの一コマでした。

職員全員でディスカッションを行ったのですが、20人の大人がいるわりに、発言は少なく、終始落ち着いた雰囲気でした。しかし、発言の一つ一つは忌憚ない各々の本音で、自分の立場や評価を気にしてのものではありませんでした。前職では、常に上司や人事部の目を気にして行動していましたので競って手を挙げるのが当たり前、「上司」のいる場で発言を行わない人がいる！というのは驚きでした。「上司へのアピール」をしない一方で、日々の業務では、プログラムやシステムを常に「カイゼン」していて、面白いなと感じました。

ここまで、当財団に入って感じたことを綴ってきました。すべて側面的な話となっていました。皆様にも少しでも財団の雰囲気を伝えることができているら幸いです。



【国際助成プログラム】
2018年度国際助成プログラム助成金贈呈式を開催

10月17日、ハイアットリージェンシー東京（東京都新宿区）にて国際助成プログラム助成金贈呈式を開催しました。

第一部では、常務理事挨拶、担当者によるプログラム趣旨説明の後、2016年度・2017年度に助成を受け活動を行った有森直子氏と山下彩香氏から「報告いただきました。お二人はプロジェクトの成果や課題、今後の展望に加え、チームによる試行錯誤の様子や国内外の現場での感動など、プロジェクトを進めるなかで得た体験を生きいきと語ってくださいました。

続いてパネルディスカッションでは、末廣昭教授（学習院大学）、武内進一教授（東京外国語大学）、小川忠教授（跡見学園女子大学教授）、玉懸光枝氏（株式会社国際開発センター）にご登壇いただき、現在実施中の国際助成プログラムの振り返り評価に関して貴重なコメントをいただきました。

第二部では、当財団の遠山理事長からの挨拶、末廣昭選考委員長による選考経過報告に



遠山敦子理事長より贈呈書の授与

続き、遠山理事長より今年度の助成対象者お一人ごとに贈呈書が授与されました。助成対象者の方々からは、これから取り組むプロジェクトの紹介と抱負についての

一分間スピーチをいただき、続けて開催された懇親会では、みなさまの意気込みを受け、財団関係者や来賓を含む参加者約80名が明るく和やかな雰囲気の中交流することができました。

翌10月18日には、新宿三井ビル29階の会議室にて、今年度の助成対象者どうしの交流とプロジェクトのブラッシュアップを目的としたワークショップを行いました。丸一日かけて実施したこのワークショップでは、活発な



ワークショップでのディスカッション

は、活発なディスカッションがなされ、トヨタ財団にとっても各プロジェクトをさらに理解し、助成対象者のみなさま一人ひとりとコミュニケーション



【国際助成プログラム】
第9回東アジア市民社会フォーラム開催報告

2018年10月26日、第9回東アジア市民社会フォーラム（East Asia Civil Society Forum, EACF）が開催されました。日本・中国・韓国の東アジア3か国の草の根レベルでの相互理解と市民交流を目的とした本フォーラムは、日中韓の持ち回りで毎年ホスト国を移しながら年に一回開催されています。トヨタ財団からは、国際助成プログラム担当である楠田が実行委員会メンバーとして参画し、企画運営に携わっています。

今回で第9回を迎えたEACF、今年開催地は中国。上海から高速バスで約3時間、江蘇州無錫市に位置する江南大学でした。フォーラムのテーマも毎年変わるので

すが、今回のテーマは「農山村における地域創生と市民社会組織」と、各国関心の高い時宜を得たテーマが設定されました。当日のフォーラムは、本テーマに関する経験と実績を持った実践者、各国からそれぞれ3〜4名が自らの活動について報告を行い、次いで全体のディスカッション、質疑応答という丸一日がかりの構成。日本からの参加者12名、韓国からの参加者22名を含め、合わせて約100名が江南大学の会場に集いました。

日本からの報告者は、安藤周治氏（ひろしまね理事長／基調講演）、伊井野雄二氏（赤目の里山を育てる会理事長／事例報告）、中嶋健造氏（土佐の森・救援隊理事長／事例報告）の3名。今や全国各地に点在する「道の駅」生みの親の一人でもある安藤氏からは、



質疑応答の様子

1970年代から中国地方で地域づくりに携わってきた自身の経験を交えながら、約半世紀にわたる日本の農山村のマクロレベルの変遷が報告されました。伊井野氏からは、鳥取で生

まれ育った自身が三重に移住し、地域との対話を重ねながら里山保全に携わってきた経験が報告されました。中嶋氏からは、日本の国土の7割を占める森林を持続可能な形で活用する一つの方法論として「自伐型林業」の有用性が紹介されました。中国および韓国からの報告者も、それぞれに自らの暮らす地域で着実な活動を実施してきた方々で、質疑応答のセッションは時間を大幅に超えての盛況となりました。

これで9回のフォーラムが実施され、日中韓3か国がそれぞれ3回ずつホストを経験したことになります。今年には日本で開催予定ですが、第10回という記念の場になるということ、また、そのときどきのテーマをより深掘りしたいという思いもあり、開催の形式についても再考される予定です。具体的には、大人数を呼ぶでのシンポジウム形式のみではなく、より密度の濃い議論と成果発表を可能にするべく一部についてはセミクロードのラウンドテーブル形式にしたり、分科会形式にすることなどが検討されています。いずれにせよ、政治的にはセンシティブな課題も孕む日中韓3か国が、年に一度とはいえこうして草の根レベルで着実に繋がっていくことの意義はますます高まるでしょう。

トヨタ財団としても、プログラムオフィサーが実行委員として参画したり、適宜テーマに沿った報告者をこれまでの助成対象者ネットワークから紹介したりと、助成事業以外の分野でも社会に貢献できる取り組みを今後も続けていく予定です。（楠田）

INFORMATION

「かめおかプラスチックごみゼロ宣言」が発表されました

前号で紹介した2017年度国内助成プログラム「発信・提言助成」の助成対象団体である、特定非営利活動法人プロジェクト保津川（代表：原田禎夫氏）が取り組むプロジェクトの一環で、2018年12月13日、京都府亀岡市と市議会は、レジ袋など使い捨てプラスチックごみをなくそうと、全ての小売店にプラスチックのレジ袋の提供を禁止する条例を制定する方針を明らかにしました。

海 洋・河川の汚染を減らすのが目的で、発表された「かめおかプラスチックごみゼロ宣言」によると、市内の小売店で配るレジ袋を2019年度中に有料化し、20年度中には配布自体を禁止する条例制定を目指すとのこと。有料での提供も禁止するのは全国でも初の試み。環境省も将来的にはレジ袋の有料化を義務付ける方針を発表していますが、亀岡市ではいち早く条例の制定を目指すことになりました。

なお宣言には、家庭から出るプラスチックごみの市内リサイクル率100%を目指すことや、マイボトルを持ち歩く人向けの給水スポットの整備なども盛り込まれました。



写真左から4人目が原田禎夫氏

から出るプラスチックごみの市内リサイクル率100%を目指すことや、マイボトルを持ち歩く人向けの給水スポットの整備なども盛り込まれました。



海老原さんのインタビューで利用したカフェで、ラテアートを作ってもらいました (P.8参照)。
[Y.N.]

【編集後記】
LAST WORD

ことに注目、そして仕事として注力をしておりましたが、財団ではプログラムオフィサーとして国内助成を担当し、さまざまなプロジェクトに触れることによって日本国内の社会課題への取組みについて興味がどんどん湧いてきました。
また、今号の「おじゃまします」で初めて淡路島を訪問して関わった方々の温かさに触れ、経験や知識の豊かさに驚き、個人的にもプログラムオフィサーとしてもとても勉強になりました。[E]

サラーンさんの文章からも伝わってきます。
〈若さ〉には、自由になる力があるような気がして、みなさんの力強い言葉に、わたし自身も背中を押される思いでした。今回インタビューにご協力くださったKEIYAのみなさん、寄稿してくださったチューブ・サラーンさん、本当にありがとうございました。[T.M.]

●●● あけましておめでとございます。本年もよろしく願っています。

●●● 特集のテーマを前に、〈若さ〉につながる価値にはどんなものがあるのかと考えると、まず浮かんできたのは、将来性とか伸びしろとか、なにか組織あるいはどこかの社会が求めるものを満たすことへの期待を感じるような言葉でした。

ですが、今回KEIYAのみなさんへの座談会型インタビューを通して感じたのは、大きなものに埋もれがちな魅力や課題に光をあてる活動のなかで、みなさん一人ひとりが豊かな可能性と選択の喜びを創り出していることです。このことは、次の世代の若者のために道を切り開こうとするチューブ・

●●● これまで対談や鼎談など、どうしても紙面に載せきれずたくさんの貴重なお話を泣く泣くカットしてまいりましたが、今号より入りきらなかつた特集部分をウェブサイト(<http://www.toyotafound.or.jp>)またはQRコードを参照)にて拡大掲載することにいたしました。今回はインタビューにご協力いただいた4組の皆さんのお話と稲見のOPINIONをご紹介します。
「JOINT」バックナンバーも全号ご覧いただけますので、この機会に是非ご覧ください。[N.]



● 昨年12月に入管法が改正(本年4月施行)された。トヨタ財団では、これまで多くの多文化共生の取組みに対する助成を行ってきたおり、改正法の影響には関心を持っている。「深刻な人手不足に対応するため、即戦力を期限付きで受け入れる」という、ある意味身勝手な狙いに基づいてなされた改正ではあるが、意外にも、ベトナムやバングラディシュなどの送り出し国側では、就業機会が増えるとして歓迎する見方もあるようだ。

ただ問題は、配偶者や子どもの帯同が認められない「特定技能1号」の在留資格者だと思う。5年の長きに亘る出稼ぎによって、離婚や子どもの養育問題など、家庭崩壊につながるケースも心配しなければならぬ。家族と離れたくないのは、どの国の人間も同じなのだから。[M.O.]

FOR THE SAKE OF GREATER HUMAN HAPPINESS

JOINT

ご意見・ご感想、また本誌送付先の変更等がありましたら、トヨタ財団ウェブサイト、あるいは同封のハガキにてご連絡いただくと幸いです。

JOINT [ジョイント] No.29

発行日 2019年1月25日
発行人 浅野有
編集 トヨタ財団 広報グループ

発行所 公益財団法人 トヨタ財団
〒163-0437東京都新宿区西新宿2-1-1
新宿三井ビル37階
[TEL] 03-3344-1701
[FAX] 03-3342-6911
[URL] <https://www.toyotafound.or.jp/>

編集協力 石井 泉
デザイン エディション・ヌース
印刷 文唱堂印刷

本誌掲載の記事、写真、イラスト等の無断転載を禁じます。



On The Journey
—旅の途上で—

猫はこたつで丸くならない?(本誌P.26参照)
● 写真提供: 加賀 道



公益財団法人

トヨタ財団

THE TOYOTA FOUNDATION



公益財団法人トヨタ財団ウェブサイト
<https://www.toyotafound.or.jp/>



UD
FONT

